

備前エリア

空き家改修 交流の場に



県立大の学生らが改修を進めている町並み保存地区の空き家

木造一部2階の建物で、推定築100年以上。薬局兼住家だったが、家主が亡くなり、改修に携わる主なメンバーは、デザイン工学科の西川博美

岡山・足守の町並み保存地区で県立大生ら

県立大(総社市窪木)デザイン工学科の学生たちが、岡山市北区足守の町並み保存地区にある空き家の改修を進めている。専門知識を生かし、建具の設計から製作まで手掛ける。来年1月にも完成する予定で、地域住民が気軽に立ち寄れる空間を目指す。(竹久祐樹)

入りやすい 雰囲気意識 来月にも完成

事業費は約80万円で、うち約25万円は、岡山市の「大学生まちづくりチャレンジ事業」の補助金を活用。残りは大学や所有者からの資金を充てる。

完了後は、地元の社会福祉法人・ももぞの学園が所有者の協力を得て、幅広い世代が交流できるコミュニティスペースとして活用する予定。

リーダーの同研究科安達駿さん(23)は「古民家の風情を残しつつ、入りやすい雰囲気づくりを意識した。たくさんの人でにぎわう場になればうれしい」と話している。

准教授(建築・都市デザイン領域)が主宰する3年生のゼミ生3人と、県立大大学院デザイン学研究所の1年生2人。1階(約25平方メートル)を対象に7月に作業を始めた。

開放感を高めるため、天井に張られていたベニヤ板は剝がし、趣のある梁を露出させた。蛍光灯は取り外し、柔らかな光の電球に更新。外扉はアルミ枠を撤去して木枠を新たに作り、歴史的な町並みに溶け込ませた。通りから室内の雰囲気分かるよう、格子枠の間隔も工夫した。塗装などを経て仕上げる。